
チョコレイト戦争

井沢あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チョコレート戦争

【Zコード】

Z3888A

【作者名】

井沢あや

【あらすじ】

松平・賢悟・七海は、男一人に女一人の幼馴染み。中学生の甘酸っぱいバレンタインデイの物語。

朝の眩しく柔らかな日差しが、薄いカーテンの布地から溢れだす。耳元でやかましく鳴る田舎まし時計を乱暴に叩き止め、俺は布団から這い出した。

俺は遅刻常習犯で、目覚ましを止めてからすぐに起きるなんてのは奇跡に近い。今日早起きしたのには、正当な……いや、田舎するところちょっと不純な動機があるんだ……。

セント・バレンタイン。「存じのように女が男に想いを伝える日。チョコレートといつ甘いプレゼントを携えて、かわいい（例外もある）女の子が男共に告白する。男にとっては、365日のいつよりも重要な心待ちにしている日だ。

そう、俺には大好きな娘がいる……。明日に控えた決戦の日、俺はなんとしても星野からチョコレートを貰わなくてはならない。男のプライドを賭けて、アイツだけには負けられないから。

のそりのそりと学校に行く用意をし、俺はやっと家を出発した。それでもいつもより随分早くに家をでき、俺は朝の空気の清々しさに驚いていた。たった少しの差で、こんなにも様子が変わるものなんだ……。

「…しおうへい？嘘つ、本物！？今日は早いね！」

「星野……」

朝からついてる！俺はそう思った。しかし、その後ろには俺が最近もつとも見たたくないヤツの顔。

俺のライバル、谷崎 賢悟だ。

「珍しいこともあるもんだな。おはよー、松平」

賢悟はいつも通り爽やかで、尚且俺を心から苛つかせる笑顔で話しかけてきた。

「お…お前またそつやつて抜け駆けして！ズルイぞ賢悟！」「抜け駆け？何いつてんだよ。お前が朝起きないだけだろ？一緒に行きたいなら早起きしろ」

星野が賢悟の隣でアハハと笑った。

「うつせえ！明日つからはちゃんと起きつから待つてろよ…」

「あたし達まで遅刻したら困るから、ちゃんとしてよ？5分までに出て来なかつたら、容赦なく置いてくからね」

星野の手厳しい言葉に、俺はうなだれるより他になかった。

この三人。つまり、俺、一宮 松平と、星野 七海、谷崎 賢悟は同じ社宅に住む幼馴染みだ。

チャイムがなる。少し立ち話をしてしまったため、俺達が学校に到着したのは登校時間ギリギリになってしまった。

「おっ、一宮！今日は間に合つたか。これからもキチンと来いよ」玄関で生徒指導の高田に声を掛けられた。始めに言つたように俺は遅刻常習犯で、プラス明るく染めた髪も祟つて、生徒指導にはしつかり目をつけられている。

「ん…？谷崎か？お前がギリギリに来るなんて珍しいな。一宮に絡まれたか？」

「先生！酷いッスよ。絡むつてなんスか！！」

俺はすかさず突つ込みを入れた。星野の前で、どうしてこうも情けないとこばかり見せなきやいけないんだ。今日はビシバシカツコイイとこ見せて、松平大好き（ハート）つて思わせる予定だったのに……。

「絡まれてないですよ。ちょっと引き止められただけです

「そうか。こんなヤツ無視して来て良いんだからな？」

辺りには、俺以外全員の、朗らかな笑い声が響いた……。

教室に一人で入ると、友人の純に冷やかされた。俺は今年、幸運にも星野と同じクラスになれた。しかも賢悟とは一組と六組で端と端だ！クラスでは、そうしようと思えば星野は俺が独占できる。最高だね！

H.R.が始まって席に着くと、隣には星野の綺麗な横顔。こことのところ俺はやたらと運がいいんだ。

「星野、いつからアイツと一人で学校来てたんだ？」

「え？中学入つてからはずつとだよ？あつ、でも勘違いしないでね！松平を仲間はずれにしてた訳じゃないからね！」

つまり俺は、約二年間も何も知らず賢悟に抜け駆けされてたって訳だ。

「明日も早く起きれるよーに、星野がモーニングコールしてよ」「いいよー。でも目覚め悪くても知らないから

「マジで！？頼む！サンキューな！」

笑うとほっぺにエクボが出来て、目尻がキュッと下がる。大きな眼が、表情をくるくる変えてかわいくて、俺はもう星野にメロメロだ。

ただ、幼馴染みつて間柄が、俺達の関係を恋の方面へと変えづらくしていた。星野はおれと賢悟のどちらを好きなんだろ？あるいは他に好きな奴がいるのか……。

いつか星野が俺や賢悟以外の男と楽しげに歩く日が来るとしたら、俺はどんな気持ちがするだろ？……。考えるのも嫌で、俺はすぐに思考を振り払つた。

明日はセント・バレンタイン！なんとしてでも、星野から本命チヨコを貰うんだ！

今年こそ田指せ両想い！

「松平つてさ、見ると飽きないよね。たまに何考えてんのかなって思っちゃう」「は？

「さつきから、こんな顔したり、こんな顔したりしてるんだもん
星野は自分の顔を伸ばしたり摘んだりして言つた。お前の事考えてんだよ！」

「俺はそんな顔してねえよ」

「してたもん～」

星野はクスクスと笑つ。ムカつくけど、その数倍愛しさが込み上げる。星野は、家族のようで、友達のようで、それでいて大好きな女子だ。

「松平」

「何スカ。賢悟くん」

「何つて……お前が呼び出したんだろ？俺はお前と違つて忙しいんだからふざけんなよ」

昼休み、俺は結局星野になんのアピールも出来ず、取り敢えず生徒会室に戦線布告しにせつて来ていた。言い忘れてたけど、つーかどーでもいいけど、賢悟は現生徒会長だ。

容姿淡麗、成績優秀。人望も厚く、女にもモテル。完璧すぎていヤミな奴……。一つだけ、スポーツだけは勝てる自信あるけど。

「明日はバレンタインじゃないですか、賢悟くん」

「ああ、そうだな」

「今年こそは、キチンと白黒つけたいんですよね」

賢悟の田の色が変わった。

「それは俺も同じだ」

「勝負だ。俺と、お前と、じちりが星野のチヨコをゲット出来るか

……」

「じちりが七海にチヨコを貰えるか……」

「手加減はしねえぞ？」

「それはじちの台詞だ。お前こそ、ハンデが欲しいなら今のうち

だぞ？」

賢悟の口が「ヤ」こと弧を描く。

「「勝負だ！」」

そうして、俺達は互いに背を向けた。バレンタイン闘争は、今始まつたばかり……。

教室に戻ると、自然と田が星野を探す。星野は女友達と盛り上がりしているところだった。

「それで七海は？」一富と生徒会長、どっちが好きなの？」「え？え？あたし達、そんなんじゃないよ」「だつてずっと一緒になんでしょう？絶対どっちかは好きだよ」「そうだよね～」

「きやつ、松平！やだあ…何してんのぉ！？」
ちつ……。バレたか。ひつそり混じつてたつもりだったのに。
だけど、真っ赤な星野もかわいいなあ～。

「そりゃあ男として？」一ゆづ話題は素通り出来なかつたつてやつ？」

「女同士の会話なの！入つて来ないでよ！」

怒つてる星野も。どんな星野でも俺は愛しちやつてるからね。

「明日、楽しみだな～」

「うるやっこ～！」

「ホント仲良いよね～。羨ましいわ」

「カナもひめひめ～！」

「あ～こわ～」

今度は、星野以外全員の笑い声が響く番だった。

これで少なくとも、星野は俺を意識してくれるだろ？いや、まだまだけど。こんなんじや、また賢悟とお揃いの義理チョコになつちまう。

告白……、その一文字が俺の頭に浮かび上がった。

あとは一歩進む勇気だけ……。賢悟より先に星野に告白するんだ。

大丈夫。何もかも上手く行く。

「星野、今日帰り一緒に帰るつぜ。ちょっと付き合えよ

「松平イジワルするからどーしようかなあ~」

星野はわざとらしく頬を膨らませてみせた。

「『めんつて!マジで。星野様~』

「しょうがないな~。じゃあ力力オのケーキで許してあげる

力力オは、駅前にある星野のお気に入りのケーキ屋だ。

「かしこまりました!じゃあ帰りにな

「やつたあ!ありがとう~

星野の笑顔が見れるなら、ケーキ一個くらい安いもんですよ。放課後のことを考えると、俺は今からついつい浮かれてしまった。

放課後、俺たちが教室を出ると、そこには笑顔の賢悟が立っていた。もちろん俺は無視して通り過ぎようとした。

「えつ…あつ、待つてよ松平!」

俺がぐいぐい引っ張つたからか、星野はすつとんきょうな声をあげる。

「そうだぞ松平。シカトは流石に酷いんじゃないか?」

「行くぞ星野、今日は一人じゃなきゃ駄目なんだ」

「何? 一人とも…仲良くしてくんないきゃ嫌だよ!」

星野が俺の腕を振り払つた。きっと俺は、捨てられた子犬みたいな表情をしてたと思う。誰に嫌われたつていい。ただ、星野に嫌われるのだけは耐えられないと思つた。

「『…めん、あたし』

辺りを気まずいフインキが漂う。

「分かつたよ……。賢悟と一人がいいならそつすればいい

「松平! 違うの! 話聞いて!」

星野が学校の外まで着いてくる。何事かと、下校中の生徒達がジ

ロジロ見てきた。

「違わないんだろ?」

「あたしはただっ……」

俺が立ち止まって振り向くと、星野は大きな目に涙をいっぱい溜めて、俺より頭一個下の方で震えていた。

「泣くなよ

「うつ……だつてえ」

下手すれば鼻水まで流れできそうな顔して、星野はそう言った。公衆の面前とか構わないから、抱き締めてしまいたかった。しかし、あと一步遅く……。

「七海を泣かさないでくれます?」

実際に星野を後ろから抱き締めたのは賢悟の方だった。

「生憎今日は俺が先約なんだ。横から入つてくんじゃねえよ

「早いもの勝ち主義なんて、小学生じゃあるまいし。七海は二人がいいんだよな~」

頷いちゃつたよ……。だけど俺だつて幼馴染み。星野が泣き落としに弱い事くらいは知つてている。

「星野……大事な相談があるんだ。今日だけは一人で話したい……頼むよ」

じわくさに紛れて、星野を賢悟から引きはがしながら俺は言った。眉を下げる、いかにも困つてますつて顔をつくる。

「うん、分かつた……。賢悟、ごめんね。今度絶対埋め合わせするから!」

俺たちが並んで歩き出ると、後ろから賢悟の舌打が聞こえてきそうだった。

冷え込んできた外気にさらされながら、俺たちは並んで歩く。漆黒の空に細い月が浮かび、猫の目のように俺たちを見下ろしていた。

「星野、ちょっと座らない？」

力力才のケーキは眞かつたし、会話も弾んだ。学校での「ゴタゴタ」なんて、ほんの少しも引きずらずにここまで来れた。大丈夫、星野が嫌な顔をしてるのは、ここが公園のベンチで少し寒いからに他ならない。

「ほら」

俺は有無を言わせず星野を隣に腰掛けさせた。

「相談つて何？進路の事とか？」

「いや、正しくは、話があるんだ……」

俺はゆっくりと深呼吸をした。なんて静かなんだろう。心臓の動くのが、異様なほど煩く耳に届いた。

「……七海」

星野はいくらか驚いた顔をした。俺が星野を七海と呼ばなくなつてから、どのくらいがたつただろう。

意地つ張りで、強情で、恥ずかしがりやだつた小学生の俺は、星野を七海と呼ぶことをいつしか躊躇うようになつていた。

俺、星野、賢悟。思い起こせば、三人でいない時なんて無かつた。馬鹿で陽気な俺と、賢く冷静な賢悟。俺たちが互いをライバルとして意識する様になるのにそう長くはからなかつた。

星野抜きなら、良い友として互いを分かりあえただろうか……？いや、今は昔の回想になんて浸つてゐる場合じゃない。目の前の現実に戻らなくては。

「七海……には、いつも感謝してる」

「……うん。どうしたの？ 急に」

「俺が馬鹿な事やつたら叱つてくれて、困つてる時は手え貸してくれて、辛くても笑顔を忘れない所とか尊敬してるし、他にもいろいろ……。言い尽せないけどホントに、14年間、俺の側に七海がいてくれた事に感謝してるんだ」

星野の顔を見るのが照れ臭くて、俺は前ばかり見ていた。今、君はどんな顔をしている？

「だから、ありがとう」

「うん」

俺はゆっくり深呼吸をした。頭の中は暫てなくらい冴えている。

大丈夫だ。

「だから、眞く言えねえけど、七海には……これからもずっと側にいて欲しい」

星野はもう、相槌を打つこともしなくなつた。俺の言おうとした事に、薄々気付いているのかもしない。

「……好きだ」

言いたい事は、まだいっぱいある。伝えたい気持ちは、まだ溢れてるけど、一言で充分だと思えた。

「返事はいつでもいい。七海の気持ちの整理がつくまで、いくらいでも待つから」

「……はい」

チラリと横を見ると、星野の頬は桜色に染まっていた。月明かりに照らされ、今この一瞬だけの美しさ。大人になつても、今日の情景は色褪せず輝き続ける気がした。

「じゃ、帰るか！」

その後俺は星野を送つて帰つたけど、俺たちは一言も言葉を発さなかつた。有るのは程良い緊張感と互いの息遣い。

時々寒そうに手に息を吐きかける七海を見て、手を握つたのは俺のほんの些細な勇気。

七海は何も言わなかつたので、俺達は幼い頃のように、そのまま手を繋いで歩いた。

翌朝、俺は柄にもなく寝付けなくてまた早起きした。

母さんは大雪が降ると言われだし、父さんには褒められた。もう中学生なのに。照れくさいからやめて欲しい。

星野からのモーニングコールは来なかつた。

「おはよー、マジダイラ。昨日はせぞ楽しかつたんだりうね

「俺はマジンじやねえ」

「細かいこと言つなつて。七海は?」

「見ての通り、まだ来てねえよ」

俺達は社宅の入り口で待ち合わせをした。しかし普段なら一番に来るはずの七海がまだ来ていないので。賢悟はどうか知らないけど、俺はさつきからかなり心配していた。

「迎えにいくか」

「そうだな」

エレベーターは、9階辺りを進んでいく。

「お前、昨日七海に告つたんだろ」

「どうかな」

男一人。エレベーターは7階。

「抜け駆けした氣でいるんだろ?」

「別に。先に言つたからどうなるつてもんでもねえだろ」

モーター音と沈黙。5の数字が点滅する。

「大きな勘違いだな」

「何のことだ?」

「誰もいない、玄関ホール。3階……。

「馬鹿だな。もつと頭つかえよ」

「さつやと聞えよー」

2。

「俺も昨日、七海に告白したんだよ」

「チンー

「おはよー。ごめんね、待つた?」

頭の中が、真っ白になつた氣がした。一体こいつの間に?やつぱり

賢悟は、抜け駆けの天才だ。

「おはよう七海。今ちょうど迎えに行こうとしてたんだよ」

「ほんとじめんね！」

「気にするなつて。さあ、行こうか」

二人の会話がすぐ遠くに感じる。口の中の、水分全部絞り出されたみたいに喉がカラカラだ。なのに汗はじんわり吹き出してきて。これって冷や汗ってやつ？

そもそも俺はなんで焦つてるんだ？ 賢悟が七海を好きな事なんて、前から分かっていたことなのに。

星野は、賢悟になんて返事をしたんだ……？

「待てよ！」

俺は叫んだ。心の叫びだ。

「松平……？」

星野、そんな困った顔すんなよ。男同士、きりんと決めなきゃいけねえ勝負つてもんがあるんだ。

「だったら話は早い。ここではつきりさせよ！」

「松平、落ち着けよ。学校に遅刻する」

「あいにく俺は、お前と違つて今日一田向もなかつた風に過ぐすなんて芸当出来ねえんだよ」

星野を困らせる事くらこちゅんと分かってる。

「話は昼休みにしよう」

「なんでそんなに冷静なんだよー。俺はてめえのやつゆつ所が理解できないね！」

「俺はお前のすぐかつとなるといひに着いて行けないな」

「やめてよー！ 人とも！」

星野の一聲で、その場は信じられない程静かになつた。

「喧嘩しないでー。あたしは……松平も、賢悟も、おんなじくらう大好きなの。どっちか決めるなんて出来ない」

「七海……」

「ずっと三人がいい！ どうしてそれじゃダメなのぉ？」

星野はまだ子供で居たいと言った。しかし俺達は確実に大人になつていく。

ずっと三人一緒に居なんて不可能だ。俺達が星野に恋をしてしまったから。

14歳。細い綱の上に立つてゐる、微妙な年齢。

一步間違えば、暗闇に、墮ちてしまいそうな……。

「ごめん。困らせて」

俺は星野を抱きしめた。今度は、賢悟より早く。

「松平、は……離して！」

「離れるよ！ 七海が嫌がつてゐるだろ！？」

「今じゃなくつていい。今は三人一緒に構わないから、いつか、俺の事を好きになつてくれないか？ 幼なじみとしてじゃなく、男として」

そうして俺はあつさりと星野を離した。星野は真つ赤だったが、もう困つた顔はして居なかつた。

俺は余裕で微笑んだ。

「よしつ、学校行くかあ！」

今年もまた、賢悟とお揃いのチョコレートだな。

中学二年、冬。

俺達は日々成長していく。

笑い、泣き、支え合いながら。

確かな友情がそこにある。

未来がどうなつてゐるかは分からない。

過去の幸せな時代にも戻れない。

ただ、俺達は前だけを見て歩んで行く。

今はまだ、チョコの様に甘い少年期。

俺達のチョコレート戦争は、まだ序章にしかすぎないのかもしだ

ない。

そんな、中学一年、怒。

- TO Be Continued ?

(後書き)

このような稚作に最後までお付き合いで下りありがとうございました
たゞ（――）機会があれば三人のその後なんて書いてみたいな
と想つている作者であります。それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3888a/>

チョコレイト戦争

2010年10月8日15時11分発行